

女性の社会活動とヒューマン・エコロジー ——19世紀～20世紀のアメリカ合衆国マサチューセッツ州を事例として

Women's Social Activities and Human Ecology:
A Case Study of the State of Massachusetts, United States,
in the 19th and 20th Centuries

湯澤 規子 (法政大学)

Noriko Yuzawa (Hosei University)

Abstract

The economic events of the Industrial Revolution in Japan and the United States during the 19th and 20th centuries profoundly changed the relationship between the environment and human beings. The industrial revolution brought about two environments: the “social environment” of family, labor, and living space, and the “physical environment” of water, air, soil, and food.

In the midst of these environmental changes, women not only relied on labor management by companies and the state, but also developed proactive social activities in order to maintain their dignity and health as human beings. Within this trend, it is noteworthy that the concept of “human ecology” was proposed by Ellen Swallow Richards in the United States.

Ellen's ideas and practices, which were rooted in daily life, developed into social activities led by women, and provided the impetus for a shift in thinking to “social care” during the Industrial Revolution, when the United States was shifting from a society based on “family care” to “individual care”. Ellen's vision of care was not only for human society, but also for the natural environment surrounding humans, such as water, air, and food, as well as for non-human organisms. In the larger scheme of things, she was raising the question of how to reconstruct “life” and “daily life” in the context of any kind of relationship. In conclusion, Ellen's thoughts and practices can be evalu-

ated as having great implications for the theme of this symposium, “Searching for Well-Being of Humans and the Environment”.

キーワード

ヒューマン・エコロジー、エレン・S・リチャーズ、産業革命、社会活動、ケア

はじめに——問題の所在

本シンポジウムの共通課題である「フェミニスト経済学とエコロジー——人間と環境のウェルビーイングを模索する」について考えた時、それは現代的な問題であると同時に、きわめて歴史的な問題でもある。なぜなら、産業革命期において環境に大きな変化が生じた局面において、人間と環境の関係性に関心を寄せ、その改善に取り組んだ女性たちの社会活動が展開した歴史があるからである。その社会活動は例えば食という問題に関連して激動する社会の中で「胃袋の面倒を誰が見るのか」という、いわばケアの問題にもつながっている。

19世紀から20世紀の日本とアメリカ合衆国における産業革命という経済事象は環境と人間の関係を大きく変化させた。しかし、19世紀までの欧米では、人間が環境に直接影響を及ぼすとは考えられておらず、人間的側面を欠いた環境学が展開していた。こうした状況に対して、アメリカ合衆国マサチューセッツ州において、エレン・S・リチャーズという女性化学者が人間と環境の関係改善、換言すればウェルビーイングを目指して、「ヒューマン・エコロジー」という概念を提唱したことは注目に値する。それは2つの環境、すなわち水、空気、土、食などの「物理的環境」および、家族、労働、生活空間などの「社会的環境」が人間活動と深く関係しながら相互作用を有しているという考え方である。この思想と実践は後にボストンにおける女性たちの社会活動へと継承されていく。

日本におけるエレン・S・リチャーズの研究の第一人者である住田(2007)によれば、エレンは「環境を人間社会を含むエコロジーの視点から『総体』として把握し、科学の在り方や人間の可能性を追究し続け、“アメリカ公衆衛生学の母”、また“家政学の母”と称された」。そしてそれは「社会的エコロジー」とも呼べる学際科学の創唱でもあった。

このような思想はいかにして生まれ、展開したのだろうか。本報告ではエレン・S・リチャーズの思想と実践を、産業革命という時代背景を視野に入れて素描することを第一の目的とする。そして、ボストンの女性たちが人間としての尊厳と健やかさを手離さないために、企業や国家による労務管理などに依拠するよりもむしろ、主体的な社会活動を展開した意義について、ケアという視点に照らしながら検討することを第二の目的とする。

本報告の構成は以下の通りである。まず産業革命期の環境変化の中で、女性の人生や暮らし、そして社会的位置づけがどのように変わったのかを日本とアメリカ合衆国を事例に考察する（第2章）。次に、化学者、社会活動家となるエレン・S・リチャーズの生涯を概観し、その具体的実践として、マサチューセッツ州の上下水道調査研究および「ニューイングランド・キッチン」と名付けられたパブリック・キッチンの試みを紹介する。それらの実践が「ヒューマン・エコロジー」の誕生へとつながり、後に家政学へと転換していくことにも言及する（第3章）。人間と環境のウェルビーイングについて議論し、実践したのはエレン・S・リチャーズだけではなかった。その意思を継承した女性たちの組合（Women's Educational and Industrial Union：以下、WEIUと表記する）がボストンにおいて様々な活動を展開した。こうした女性たちの社会活動の歴史は、本シンポジウムとも深く関わる事象である。第4章ではその実践を紹介する。以上を総括して、エレン・S・リチャーズによって提唱された「ヒューマン・エコロジー」の意義を再考、再評価する（第5章）。

1 産業革命期の環境変化と女性の Life

(1) 日本の産業革命と環境変化

デヴィッド・ハーヴェイはその著書『ポストモダン性の条件』において、時間と空間をめぐる私たちの経験は、様々な歴史的契機によって変化と再編を繰り返してきたことを論じている。同書では特に、資本主義の発展という歴史的・地理的ダイナミズムが時空間に根本的な変化と再編を促したことに着目し、「時間と空間の圧縮」という概念によって近代化によって生じた社会構造の変化が説明されている。

本報告では歴史的・地理的ダイナミズムが生じた局面として、産業革命という経済事象および女性たちの人生や日常に着目する。例えば日本では、工場が増加し、工場集積地域や都市に工場労働者が流入すると、そこには新たな日常生活空間が生まれた。1920年代の東京市深川地区を事例として労働者の食空間と日常生活世界を分析した湯澤（2023）によれば、19世紀末から20世紀初頭にかけて、同区は工場、人口ともに急増し、東側の農村部も組み込みながら工業集積地域へと変貌した。自然環境が大きく変化したことはもちろん、人口構成には外部からの流入者が加わり、労働者が集住する日常生活空間が形成された。

食空間に着目すると、そこには明確な男女差が生じていた。男性労働者たちは工場内外で民間食堂、公営食堂、残飯屋など、様々な生活空間を利用していたが、女性労働者たちは1927年に「自由に外出する権利」を得るまで、その生活は工場内に限られ、女性の社会活動とヒューマン・エコロジー



図 ニューイングランドの工場生活「ベル時間」。

(出典：ハーパーウィークリー (1868年7月25日付)、Winslow Homer (1836～1910 年) 作、
New England Factory Life: “Bell-Time”, from Harper's Weekly, July 25, 1868.
Smithsonian Open Access.)

工場炊事を集団食が彼女たちの食事を賄っていた。

そうした状況の中で、限られた事例ではあるが、例えば「私たちが日本人の若い娘です。人間らしいものを食べて、人間らしく、若い娘らしくなりたいと思いますので、食事の改善を要求いたしましょう」という演説があり、社会的環境（生活・労働）と物理的環境（食）の改善を要求した女性たちの活動が展開した⁽¹⁾。これは農村家族から離れて工場地域で暮らすようになった女性たちの日常生活の変化と、その中で生じた胃袋に対する社会的ケアの要求と解釈することができよう。

(2) 米国マサチューセッツ州の産業革命と環境変化

19 世紀の米国マサチューセッツ州では、織物工業と製靴工業が興隆していた⁽²⁾。周辺農村から集まってきた労働者たちは工場の「ベル」によって管理され、農村での生活とは異なる日常生活空間を生きることになった（図）。同州最大の織物工業集積地域であったローウェルでは、寄宿舍制度が整えられ、農漁村出身の女性労働者たちは日本の

女性労働者たちと同様、新しい日常生活世界を経験することになった。19世紀半ばの大移民時代が到来する以前は、女性労働者たちは工場に付帯する寄宿舎での集団食と集団生活によって、いわば社会的ケアを受けながら働いていたことになる。

ところが多くの移民が労働者として流入するようになると、寄宿舎制度や集団食は廃止され、工場による胃袋のケアはなされなくなった。とりわけ「食」に関しては、個人的ケアへと移行したことになる（湯澤：2020）。1855年の統計によれば、ボストンにおける白人系アメリカ人の住民数に対して、移民の数はその6割程度に達していた⁽³⁾。ボストンの人口構成は急速に変化したことになる。また、1900年のボストン市内の写真をみると、工場の煙突から煙が立ちのぼり、鉄道が敷設され、工業発展が目覚ましい都市景観へと変貌していることがわかる⁽⁴⁾。エレン・S・リチャーズが提唱したところの、水、空気、土、食などの「物理的環境」および、家族、労働、生活空間などの「社会的環境」が大きく変化していることが推察される風景である。

2 ヒューマン・エコロジーの誕生——エレン・S・リチャーズの思想と実践

(1) エレン・S・リチャーズの生涯

このような産業革命によって生じた変化の中で、エレン・S・リチャーズは州の中央を流れるチャールズ川の変化を観察し、地道で綿密な水質調査によってマサチューセッツ州における急速な工業化と水質の悪化が関係していると証明した。

1871年、マサチューセッツ工科大学で化学を担当する教授からの依頼で、エレンはアメリカ合衆国最初の州保健局を創設したマサチューセッツ州の水質調査に協力することになった。工場設置と下町の下水による河川の汚染、下水と上水との関係などが主な調査課題であった。急速な都市化と産業化が進むマサチューセッツ州では、「公衆衛生」に対する関心が高まり、そこに化学が貢献できることをエレンは感じ取り、調査に没頭した。その成果は目覚ましく、化学者としてのエレンの信頼を高めるのに十分であった。この仕事は後に「正常塩素量地図」として一般法則化され、水質に関する衛生学的調査の基礎となる大きな成果へとつながった。そして、人間と環境は相互に関わり合っており、影響を及ぼし合うという「ヒューマン・エコロジー」という考え方へとたどり着く最初の一步となった。以下ではエレンの生涯を概観し、その思想と実践が生まれる背景を考察しよう。

エレン・S・リチャーズはマサチューセッツ州で1842年に生まれた⁽⁵⁾。実家の雑貨屋を手伝いながら学問を志し、ローウェルに近いウエストフォードという町でウエストフォードアカデミーに入学する。病気がちな母の体調が悪い時には、エレンが料理、洗濯、アイロンかけ、掃除などの家事一切を取り仕切った。のちに「生物学」や「化学」に興味を
女性の社会活動とヒューマン・エコロジー

持ち、さらには「家政学」を創設するエレンは、こうした子ども時代から娘時代における日々の暮らしに根差した経験から多くを思索したのだろう。

女性に対して大学が門戸を閉ざしていた時代が長く続いていたが、エレンは偶然にもアメリカ合衆国初の女子大学、しかも男性と同じカリキュラムで学ぶことができる「バツサー大学」が設立されることを知る。そして、2年間かけて入学資金を貯め、1868年に同大学に入学した。多くの学びの中でもエレンが最も情熱を寄せたのが、「化学」であった。化学の教授チャールズ・ファラーは、日常生活と関連した実用性を見出すための化学を重視し、靴墨、ベーキングパウダー、洗剤や食料品などを実験室に持ち込み、これらの物質が化学的にどのような成分から構成されているのかを分析する手法で、化学の面白さを伝えた。のちにエレンが「台所から社会を変える」実践を展開した萌芽は、このバツサー大学での化学の講義によって育まれたに違いない。

バツサー大学を卒業した後、女性の入学を許可していなかったマサチューセッツ工科大学に、初めて女性の特別学生として入学を許可され、卒業後も教員として同大学に関わった。生涯教授にはなれなかったが、後に続く女性研究者たちの育成にその生涯を賭した。ヒューマン・エコロジーの提唱とは別に、こうした女性教育への貢献も重要である。アメリカで「環境」を論じた最初の女性は『沈黙の春』の著者、レイチェル・カーソンといわれることが多いが、実はそれよりもかなり先んじて、エレンが「人間と環境」について論じていたことは特筆されるべきだろう。レイチェルの研究拠点であり、津田梅子が生物学に目覚めたウッズホール海洋研究所は⁶⁾、奇しくもエレンが創設に関わった研究教育施設だったことを考えると、彼女たちの原点はエレンが築いたのだといえる。

(2) 上下水道調査とパブリック・キッチン

エレンはその生涯の中で、2つの環境に関わる研究成果を残した。その1つは前述した上下水道調査による水環境に関する研究である。そしてもう1つは「食」を通して社会改善を目指すパブリック・キッチンの提唱である。

水環境に関する研究は、マサチューセッツ州という地域スケールへの関心だけでなく、日常生活や家庭というよりミクロなスケールにおいても展開した。次頁表に示したような研究成果に結実している。水環境に関する研究は、エレンのライフワークでもあった。7つの成果からその内容を大まかに見ると、①水という物理的環境を家庭や地域、日常生活という社会的環境と関連させて理解していること、②環境への人間の働きかけを重視し、日常生活における信念や習慣が環境を改善すると主張していること、③日常生活の担い手としての女性たちを社会的存在として見出していること、④環境に影響を及ぼ

発表年	タイトル	内容
1887	Home Sanitation : A Manual for Housekeepers	家庭の衛生は時代的要請として、社会的、経済的学問における重要なテーマである。家庭の衛生環境について、住宅の選択、廃水設備との関係、および生活習慣に基づく予防の原則が述べられている。
1900	Air, Water and Food in Relation to Health : from a Sanitary Standpoint	健康的な生活に必要な3要素として、きれいな空気、安全な水、良い食物について、衛生化学の視点から日常生活と関連させて論じている。行政の衛生対策に影響を与える世論を形成する市民の教育に注目している点が特徴的である。
1901	The Cost of Living as Modified by Sanitary Science	衛生科学の書物として、ホーム・エコノミクスのバイブルとして発刊された。従来自然科学として研究されていた衛生科学 (Sanitary Science) を社会科学としても把握し、家庭経済学 (Domestic Economy) との関連で論じている。
1907	Sanitation in Daily Life	人間環境に関する新しい科学としてのヒューマン・エコロジーの見解を述べている重要な研究である。人間活動によって生み出される人為的環境に注目し、公衆衛生の観点から、物理的環境に対する「信念」を持つ習慣の重要性について述べている。
1908	Laboratory Notes on Industrial Water Analysis : A Survey Course for Engineers	産業用水分析の実験記録である。資源としての水研究の必要性について、水の浪費や汚染防止、適切な使用や配分に関する価値評価について論じている。
1910	Euthenics	生涯の研究成果の集大成として提唱した Euthenics (優環学) についての書。環境改善の重要性を訴えた環境教育宣言ともいえる成果である。環境改善の担い手として、女性を一人の「市民」、「社会的存在」として捉え、家庭科学 (家政学) を男女ともに必要なものと指摘している。
1911	Conservation by Sanitation : Air and Water Supply, Disposal of Water	空気、給水、廃棄物処理に関する衛生工学の専門書。当時の公衆衛生と環境保全事情がまとめられている。エレンにとっての公衆衛生学分野の集大成。

表 水環境と公衆衛生に関する研究成果一覧

(出典：住田和子 (2007) 「エレン・リチャーズの人と思想——生涯と著作」『復刻修正版 エレン・スワロウ・リチャーズ著作集 Collection Works of Ellen H. Swallow Richards 別冊解説』 有限会社エディオン・シナプスにより作成。)

す日常生活の在り方については、男女ともに学びその良き担い手となること、などがその主張であることがわかる。現代におけるケアの問題に照らしてみると、この時代にエレンが重視していたのは、水という物理的環境へのケア、家庭の日常生活という社会的環境へのケアのいずれにおいても、男女を問わず、環境教育によって倫理的市民を形成することであったと解釈することができる。

このようなエレンの主張や研究姿勢は、「食」という分野にも応用されて展開した。その実践として注目されるのは、1890年にエレンが考案して開設した「ニューイングランド・キッチン」である。これは炊事や食事を公共の場で賄うパブリック・キッチンの試みといってよく、主に欧州で始まった実践をボストンで応用したものであった。

エレンはその人生の前半を、19世紀後半のボストンとその近郊で過ごしていたことになる。アメリカ合衆国全体でみれば、65年の南北戦争終結時から93年に恐慌が訪れるまでの約30年間は、資本主義が急速に発展を遂げた、いわゆる「金びか時代」と称された。それは、カーネギーやグールド、アスターやロックフェラーが富を蓄えた時代であり、69年に最初の大陸横断鉄道が完成した後、次々と鉄道が敷設され、西部開拓も急速に進んだ時代でもあった。そして、ボストンはちょうど、「大移民時代」の幕開けを迎えていた。

ボストンの町を歩くエレンが目にしていた日常風景の中には、顔色が悪く、栄養不足に見える擦り切れた服を着ている労働者やその子どもたち、ボストンに集積していた靴工場や織物工場へ急ぎ足で出勤する疲れ果てた表情の女性たち、行きつけの酒場のスイングドアに飲み込まれていく栄養不良にみえる男性労働者たちが大勢いた。

労働者や子どもたちが極めて不健康にみえる原因は、厳しい労働環境の中での長時間労働や低賃金にあることだけでなく、労働者やその家族が、食事の栄養価や合理的な調理法について、あまりにも無知であることが関わっているのではないかとエレンは考えた。また、産業革命の渦中で成長し続けるボストンで流行する病気の温床には、都市ならではの原因があることにもエレンは気づいていた。汚染物質による物理的環境の悪化と、衣食住などの乱れによる社会的環境の悪化を同時に解決する一つの方法としてエレンが目にしたのが「家庭」という場所、そして「台所」という機能であった。それは、細分化された科学の知見を日常生活の中で統合知として統合する試みといってもよいかもしれない。

こうした模索の中で、エレンはニューイングランド・キッチンの試みに着手したのである。健康食レストラン、困窮者給食所、栄養と調理の研究所という機能をあわせ持つニューイングランド・キッチンは、1890年1月1日、ボストンのプレゼント街142番地に開設された。この場所は、アイルランド人、ロシア系ユダヤ人、イタリア人の移民たちが集住する低所得者層の居住地域だった。栄養に富んだ食事を提供する以外に、清潔で機能的

な器具を使った調理を見せることによって、労働者に対する教育的役割をも担うことが、このキッチンの目的であった⁽⁷⁾。

(3) ヒューマン・エコロジーの提唱と家政学への転換

水質調査とパブリック・キッチンという2つの成果は一見関係がないように見えるが、いずれも日常生活に深く根差した人間と環境の関係という点では共通しており、前者は物理的環境、後者は社会的環境に関わる研究と位置付けることができる。それはエレン自身の次のような言葉によっても裏付けられる。

Human Ecology is the study of the surroundings of human being in the effects they produce on the lives of men (Richards:1907) .

ヒューマン・エコロジーは人間性に関わる倫理的、社会的意味を包摂した科学であるという考え方は、経済成長を前提とした市場資本主義を乗り越えていくための総合知や、領域横断的なエコロジーの捉え方を模索する本シンポジウムとも通底する主張であり、きわめて現代的な示唆を含んでいるといえよう。

エレンは家庭生活、日常茶飯事そのものも次々と研究対象とするようになった。そして、自宅に「消費者家庭試験研究所」を創設した。これは、今日の社会でも多く存在する消費者研究所の先駆けとして注目される取り組みといえる。エレンはこうした研究を「家庭化学 (ホーム・ケミストリー)」と名付けた。エレンは家事と化学を架橋して、「家庭経済 (Home Economics)」を提唱し、これが後に「家政学」の創出へとつながっていくのである。

エレンは多くの女性を不幸にしている背景には、2つの要素の欠如があると気づいていた。それは「健康」と「創造的で知的な天分を発揮する機会」の欠如であった。日常生活の中で女性たちが常に家事に追われ、日々繰り返されるその負担によって体調を崩すこともある。そうした事情を経験的に理解していたエレンは、化学の成果を家事負担の軽減につなげ、女性たちの「健康」を実現することが重要な責務であると考えようになった。後にエレンが著した『調理と洗濯の化学』(1882年)などは、その成果とあってよいだろう。

3 Women's Educational and Industrial Union への継承

(1) WEIU への継承とその実践

エレンが試みたニューイングランド・キッチンはその真意が即時には伝わらず、その実

践が評価されるには、1893 年に開催されたシカゴ万博で「ランフォード・キッチン⁽⁸⁾」という名で食物科学と栄養学による合理的キッチンとしての意義を与えられることを待たなければならなかった。これがきっかけとなり、エレンたちの試みは、全米各地で都市問題が発生する時代において多くの共感を得て普及し始めた。以後、「栄養学」はアメリカにおける国民的運動ともいえるような、大きなうねりとなって展開していった⁽⁹⁾。

その最大の成果の1つは、公立学校への温かい昼食の配食事業である。学校給食の試みは以後、少なくとも30年間続き、エレンが1911年に没した後、その理念と実践は女性教育・産業連合(WEIU)に継承された⁽¹⁰⁾。やがてこの試みは、全米各地の公立学校にも採用されていくことになった。

WEIUは1907年に「ボストンで働く女性たちの食事調査⁽¹¹⁾」という社会調査を実施しているが、その中に次のような文章がある。

Notwithstanding the varied plans for obtaining their meals, the women living away from home showed remarkably good judgement in the choice of food. Mrs. Ellen H. Richards began her pioneer work for the promotion of public instruction in dietetics over twenty-five years ago, and throughout this period Boston has profited by a great variety of educational activities in this field.

食事の取り方はさまざまだが、離れて暮らす女性たちの食事選びの判断力は際立っている。エレン・H・リチャーズ夫人は⁽¹²⁾、25年以上前に栄養学の教育普及のための先駆的な活動を開始し、この間、ボストンはこの分野でのさまざまな教育活動によって利益を得てきた。

ボストンで働く女性たちが食を選ぶ力は、アメリカ合衆国の他の地域と比べようもないほど卓越していたようである。その背景には、エレン・S・リチャーズが取り組んできた栄養教育活動があるのだと、同食事調査には明記されている。この記述を読むと、WEIUはエレンからの影響を受け、その実践を引き継いでいたことがわかる。

(2) 都市における女性の社会活動

同時代のボストンでは、WEIUに限らず様々な女性の社会活動が展開していた。1862年から1914年のボストンにおける女性たちの社会活動をまとめた歴史地図によると(Seasholes:2019)、教育活動9、文化活動9、健康と栄養の活動5、社会福祉活動

6 (WEIU を含む)、社会改革活動 3、女性参政権活動 5、アフリカ系アメリカ人活動 4、移民支援活動 3、動物保護活動 2、宗教活動 2、保全活動 1 など、多様に展開していたことがわかる。

こうしたいわば、女性たちの中間団体による日常生活に根差した物理的環境、社会的環境の改善と再編への取り組みは、ボストンに限らず、ブルックリン、フィラデルフィア、シカゴなど工業化と都市化が急速に進む地域においても展開した。特徴的であるのは、こうした組織が女性労働者だけで構成されるのではなく、都市の中産階級の女性たちがこの運動を支えていたことである。WEIU もその例外ではなかった。

ビクトリア期の家族規範からの解放を目指した女性運動を経て、中産階級の女性たちは 20 世紀の新しい女性像を求めて様々な社会改革運動を展開した。その 1 つとして、労働者階級の女性たちと共に取り組む「シスターフッド」が成立したといわれる⁽¹³⁾。このようなシスターフッドに支えられた女性の社会活動は様々な場面で、その場に応じた形で多彩に展開した。

おわりに——ヒューマン・エコロジーの再考

(1) ヒューマン・エコロジー誕生の経緯とその意義

本報告では、エレン・S・リチャーズの思想と実践を、産業革命という時代背景を視野に入れて素描することを第一の目的とし、ボストンの女性たちが人間としての尊厳と健やかさを手離さないために、企業や国家による労務管理などに依拠するよりもむしろ、主体的な社会活動を展開した意義について、ケアという視点に照らしながら検討することを第二の目的とした。その結果は以下のように要約される。

エレン・S・リチャーズは日常生活世界に根差した化学の知識とその応用にとって、産業革命という経済活動が環境に大きな影響を与えていることを解明した。それは物理的環境（空気・水・土・食物）と社会的環境（家庭・食事・健康・地域）が人間活動と深くかかわっていることの解明であり、エレンはそれをヒューマン・エコロジーという概念として提唱した。これは人間と環境の相互作用が未だ論じられていなかった当時の学術界においては画期的な発想であった。

日常生活に根差していたエレンの思想と実践は女性たちを主体とする社会活動へと発展し、「家族によるケア」の社会から「個人によるケア」へと転換するアメリカ合衆国の産業革命期において、「社会によるケア」へと発想転換するきっかけを用意した。エレンが視野に入れていたケアは人間社会だけでなく、水や空気や食物といった人間を取り巻く自然環境や人間以外の生物にも関わるものであった。大観すれば「いのち」や「日常女性の社会活動とヒューマン・エコロジー

生活」をいかなる関係性の中で再構築していくか、という問題を提起していたといえる。その意味で、エレンの思想と実践は、本シンポジウムの「人間と環境のウェルビーイングを模索する」というテーマにも大いに示唆を与え得ると評価することができる。

(2) 課題と展望

最後にいくつかの課題を挙げておきたい。日本とアメリカ合衆国での当該期のケアの構造および女性の社会活動との関係を予察的に述べれば、産業革命、資本主義社会への移行という類似の社会事象を経験しながらも、日本では概して社会的ケアの範囲が狭く、それに連動して女性たちの社会活動は低調であった。一方、アメリカ合衆国では大移民時代を経て、社会的ケアの範囲と実践が拡大し、女性たちの社会活動がそれを支えるようになった。この違いは文化や社会構造構築の歴史と連動すると思われるが、その解明は今後の課題としたい。

また、本報告ではエレン・S・リチャーズの思想と実践を評価したが、女性であるエレンが化学者として主張するヒューマン・エコロジーは同時代では正しく理解、評価されなかった。その代わりにエレンが提唱したヒューマン・エコロジーという考え方はその後、「家政学」としての展開へとつながっていくことになる。その具体的な経緯や各学会でのその後の評価の検討作業は始まったばかりである。ヒューマン・エコロジーという概念の源流を再検討し、その意義を現代への示唆につなげる研究にもこれから取り組んでいきたい⁽¹⁴⁾。

最後に、エレンが提唱したヒューマン・エコロジーは、物理的環境としての「自然」も視野に入れているとはいえ、資本主義社会の中で様々な問題が生じるようになった人間社会への関心に重点が置かれている点に言及しておきたい。そのため、ケアの対象も人間社会としての家庭や地域、国家との関係を中心に論じられる傾向がみられる。それに対して昨今では、資本主義的な生産および再生産の仕組みに抵抗する、換言すれば自然環境との相互関係を重視した、資本主義的な特徴を備えた人間社会以外の世界を広く視野に入れた人びとが果たした役割を論じる研究が登場している（フェデリーチ：2017、Ulrich:1991）。そのような研究動向の中で、ケアを創造的で主体的な活動として自分たちの手に取り戻す意義を論じた研究も注目される（Federici:2020）。こうした考え方を「自然的ケア（Nature Care）」という概念として加えることができるならば、現代社会におけるヒューマン・エコロジーの発展的展開を検討していくことができるかもしれない。以上を今後の課題としたい。

【脚注】

- (1) 現代女性史研究会編、高井としを著 (1973) 『ある女の歴史 (その1) ——私の歩んだ道』 現代女性史研究会出版部.
- (2) Nancy S. Seasholes (2019) *The Atlas of Boston History*, The University of Chicago Press, Chicago, pp.48-49.
- (3) 前掲 (2).
- (4) 前掲 (2).
- (5) 以下は、① C.L. ハント著、小木紀之、宮原佑弘監訳 (1980) 『家政学の母——エレン・H・リチャーズの生涯』 家政教育社. ② E.M. ダウディー著、住田和子、鈴木哲也共訳 (2014) 『レイク・プラシッドに輝く星——アメリカ最初の女性化学者エレン・リチャーズ』 ドメス出版. ③ エスリー・アン・ヴェア著、住田和子、住田良仁訳 (2004) 『環境教育の母——エレン・スワロウ・リチャーズ物語』 東京書籍、に依拠している。
- (6) 古川安 (2022) 『津田梅子——科学への道、大学の夢』 東京大学出版会.
- (7) Mary Hinman Abel, foreward by Ellen Richard, (1890) *The Story of the New England Kitchen* (Harvard University Schlesinger Library). 寄付者への事業報告書として記録された。
- (8) ランフォード伯ベンジャミン・トンプソン (1753-1814 年)。マサチューセッツ州で生まれた科学者。調理を科学的に分析する食物科学に取り組んだ。最小限の出費で最大限の栄養をつけるスープを開発することが飢餓の解決に不可欠であると主張し、精白玉麦とえんどう豆のスープ (ランフォードスープ) を考案した。
- (9) シカゴ万博で配布されたリーフレットが好評であったため、展示解説を付して Plain Words About Foo: The Rumford Kitchen Leaflets としてまとめられた。住田和子 (2007) 「エレン・リチャーズの人と思想——生涯と著作」『復刻修正版 エレン・スワロウ・リチャーズ著作集 Collection Works of Ellen H. Swallow Richards 別冊解説』エディション・シナプスに含まれている。
- (10) ロバート・クラーク著、工藤秀明訳 (1994) 『エコロジーの誕生——エレン・スワローの生涯』新評論、161 ページ.
- (11) The Women's Educational and Industrial Union (1917) *The Food of Working Women in Boston*, Wright & Potter Printing Co. 原資料は Harvard University Schlesinger Library Records of the Women's Educational and Industrial Union, 1894-1955, B-8-54.
- (12) エレンの名前の表記はエレン・ヘンリエッタ・リチャーズとして示されることもある。
- (13) 羽鳥修 (1989) 「女性労働運動にみる階級と性——革新主義期における NWTUL の活動より」『アメリカ研究』(23):96 ページ. なお、アメリカ労働民衆の世界を主に男性労働者に着目して論じた研究には以下のものがある。この中でシカゴ郊外 (オークパーク) のジェンダーと家族について、若干考察されている。竹田有 (2020) 『アメリカ労働民衆の世界——労働史と都市史の交差するところ』ミネルヴァ書房. ただし、女性たちの階級間の関係の解明については、その複雑さを視野に入れた分析が必要であるため、今後の課題としたい。
- (14) Robert Dyball, Llesel Carlsson (2017) Ellen Swallow Richards : Mother of Human Ecology?, *Human Ecology Review*, 23 (2), pp.17-28. なども類似の問題意識を提示している。

【引用文献】

・和文

- E.M. ダウディー著、住田和子、鈴木哲也共訳 (2014) 『レイク・プラシッドに輝く星——アメリカ最初の女性化学者エレン・リチャーズ』 ドメス出版.
- エスリー・アン・ヴェア著、住田和子、住田良仁訳 (2004) 『環境教育の母——エレン・スワロウ・リ

チャーズ物語』東京書籍.

現代女性史研究会編、高井としを著 (1973) 『ある女の歴史 (その1) ——私の歩んだ道』 現代女性史研究会出版部.

C.L. ハント著、小木紀之、宮原佑弘監訳 (1980) 『家政学の母——エレン・H・リチャーズの生涯』 家政教育社.

シルヴィア・フェデリーチ著、小田原琳・後藤あゆみ訳 (2017) 『キャリバンと魔女——資本主義に抗する女性の身体』 以文社.

住田和子 (2007) 「エレン・リチャーズの人と思想——生涯と著作」『復刻修正版 エレン・スワロウ・リチャーズ著作集 Collection Works of Ellen H. Swallow Richards 別冊解説』 エディション・シナプス.

竹田有 (2020) 『アメリカ労働民衆の世界——労働史と都市史の交差するところ』 ミネルヴァ書房.

デヴィッド・ハーヴェイ著、吉原直樹、和泉浩、大塚彩美訳 (2022) 『ポストモダン性の条件』 ちくま学芸文庫.

羽鳥修 (1989) 「女性労働運動にみる階級と性——革新主義期における NWTUL の活動より」『アメリカ研究』 (23) : 82-99 ページ.

古川安 (2022) 『津田梅子——科学への道、大学の夢』 東京大学出版会.

湯澤規子 (2020) 「近代産業地域社会における『生活』と『労働』の再編過程——Women's Educational and Industrial Union, Boston 史料による再編主体の日米比較を視野に」『歴史と経済』 (247) : 4-17 ページ.

湯澤規子 (2023) 「労働者の食空間と日常生活世界——1920 年代の東京市深川区を事例として」『歴史地理学』 65 (1) : 93-104 ページ.

湯澤規子 (2023) 『焼き芋とドーナツ——日米シスターフッド交流秘史』 KADOKAWA.

ロバート・クラーク著、工藤秀明訳 (1994) 『エコロジーの誕生——エレン・スワローの生涯』 新評論.

・欧文

Ellen. S. Richards (1882) *The Chemistry of Cooking and Cleaning*, Whitcomb & Barrows, Revised ed, Boston.

Ellen. S. Richards (1907) *Sanitation in Daily Life*, Whitcomb & Barrows, Boston.

Laurel Thatcher Ulrich (1991) *A Midwife's Tale: The Life of Martha Ballard, Based on Her Diary, 1785-1812*, Vintage Books Edition,

Mary Hinman Abel, foreward by Ellen Richard, (1890) *The Story of the New England Kitchen* (Harvard University Schulesinger Library) .

Nancy S. Seasholes (2019) *The Atlas of Boston History*, The University of Chicago Press, Chicago, pp.48-49.

Robert Dyball, Llesel Carlsson, (2017) Ellen Swallow Richards : Mother of Human Ecology?, *Human Ecology Review*, 23 (2) , pp.17-28.

Silvia Federici (2020) *Revolution at Point Zero: Housework, Reproduction, and Feminist Struggle*. PM Press.

The Women's Educational and Industrial Union (1917) *The Food of Working Women in Boston*, Wright & Potter Printing Co. 原資料は Harvard University Schlesinger Library Records of the Women's Educational and Industrial Union, 1894-1955, B-8-54.